

随想民芸運動論(二十五)

西堀 寛 厚

九月、十月、十二月の三回、京都大学で開かれていた「縮小社会研究会」に参加した。十一月は会場が東京だったので出席出来なかったが、十一月から私も会員になった。

この間、六名の方の講演(研究発表)があり、いずれも大変興味ある内容であった。中でも特に「面白」と思ったのは、「不利益」という話である。講師は京都大学情報学科学准教授で「不利益システム研究所」の川上浩司氏、演題は「不利益・素数ものさしの不便はイヤですか」というものであった。

とばを使う人はまずいないと思う。

しかし、ことばは使わなくても、あまりにも便利すぎる現代社会に対して、不安を感じ疑問を抱いている人は少なくないのではないだろうか。便利さに対する不安、それは便利さがもつ精神的不利益を意味する。

オートマ車に乗り始めた頃の不安を思い出してほしい。飛行機はどうだろうか。飛行機に乗って、不安を感じない人があるだろうか。

「不利益」に関する講演の内容について、ここで詳細に説明する資料が手許にないし、またその積りも必要もない。私としては、民芸の世界と「不利益」という考え方の共通点を私なりにさがしてみたいのである。それが今回の主たるテーマである。

とは云え、「不利益」について基本的な知識は必要なので、「不利益システム研究所」のパンフレットを

参考にして、「不利益」とは何かを紹介しておきたいと思う。

このパンフレットの冒頭に、「気付けばしあわせ、不利益の益」とある。我々は不利益に益があるなどと思わないのが普通であるから、そういうことに気付くことはないし、気付かなければ考えることもない。何ごともそうだが、ま

ず気付くことが始まりである。縮小社会の思想にしても、拡大至上主義の限界に気付くことによって成立するのではないだろうか。ひたすらに拡大発展を続けた近代産業社会は、石油・石炭などの化石燃料の枯渇によって遠からず終焉を迎える。そのことに気付かなければ「縮小社会」という発想は生まれなかったのである。ただ、気付いてい

ても知らぬふりをすると、この習性が人間にはある。ひたすら拡大成長の方向へ世の中を動かしている政治

家・企業家・官僚・学者、あの人達は、拡大至上主義の行きつく先について、ほんとうに何も気付いていないのか。それとも知っていて、知らぬふりをしてい

るのか。どう考えても、彼らが知らないはずはないので、知らぬふりをしてい

るとしか思えない。

次に、「不利益」とはなにか。

不利益は不便から得られる効用。手間いらずで便利なもの(こと)より、手間がかかって不便なもの(こと)の方がうれしいことがある!。便利の害ーユーザーと道具の意図のずれ、

・自動化に対する不信・過信、・ブラックボックスによるタスクの不透明化。不便の益ー道具を自分で操る嬉しさ・楽しさ、自分だけのものであるという特別感、・新たな気づきや出会いの機会を創出。 「便利の害」三点のうち

「自動化に対する不信・過信」について、少し考えてみたい。まず「自動化」で

あるが、これは便利の象徴みたいなもので、世の中で便利と云われるものはすべて、人手をはぶくため自動化されたものである。自動化されたものはたしかに便利ではあるが、何となく不安や不信がある。たとえば

全自動洗濯機で考えてみよう。ほんとうに洗えているのだろうか、不要な水を沢山使っているのではないか、布が傷つくのではないか、もし水道の蛇口につながられているホースが外れたらどうしよう、家中が水びたしになるではないか……。このような不安や不信は手洗いには全くないことである。

自動化に不安や不信を感じるのは精神的な害である。これに対して、何もかも自動化にまかせてしまう過信によっておこる現実的な害もある。自動化に対す

る過信は大きな事故につながる可能性がある。

次に、「不便の益」三点の中から「道具を自分で操る嬉しさ・楽しさ」について。

若い頃、私は自分で餅をついた。いつ頃からその餅つきを止めたか覚えていないが、今も石の臼は残っている。現代社会では、餅つきどころかメシも自分で炊くことはなくなつた。ス

イッチ一つ押せば小一時間で勝手にメシが炊けるのである。始めチヨロチヨロ中パツパ……、昔の人達は自分でメシを炊いていた。それをしなくなつたのは、自動炊飯器が普及しはじめた昭和三十年代からである。

洗濯板を使って自分の手で揉洗いをすること、かまどでメシを炊くこと、これはまさに不便のかたまりのようなものだが、はたしてそこに「嬉しさ・楽しさ」があるのか。それは自分でやってみなければ分からない

のであるが、この便利社会ではそれをやる場も機会もないのである。パソコンが出来てから、自筆で手紙を書くことさえなくなつて

いる。私はパソコンをやるので今だに自筆だが……、もうこの後パソコンをやることはないと思うので、私は「自筆」という「不便の益」の中で「嬉しく・

楽しく」生涯を終えることになるだろう。

不便益九項目―楽しい、オレだけ感、自己決定感、嬉しい・懐かしい・ゆとり感・有能感・安心感・ありがたみ。

不便の機能十項目―工夫・上達、主体性、対象系ソナライゼーション、発見、他人との差を生む、長期的な関わり合い、コミュニケーション、ゲーム性。(この対象系理解というものはシステムの仕組みが使うことで理解でき、安心感が得られること。また、パー

ソナライゼーションとは使った形跡が残るので、自分だけの道具として愛着を持つことが出来ること、という説明あり)。

以上、「不便益システム研究所」パンフレットより要点を抄録した。

私は電子辞書を鞆に入れて持ち歩いているが、実に便利である。しかし、これは便利で害あるものの一つとして取り上げられてい

る。その反対に不便なものとして紙の辞書がある。広辞苑は何とか持ち歩くことが出来るかも知れないが、百科事典を持ち歩くことは不可能である。電子辞書は持ち歩くことが出来るというこの上ない便利さはある。しかし、そのシステムが理解出来ないのでは何となく不安である。それはオートマ車を運転している時の不安と同じである。つまり対象系理解が得られない不安感ということが出来る。

ところで、我らが愛する「民芸」の品は、便利だろうかか不便だろうか。どう考えても、高度な技術による機械製品に比べれば便利な品とは思われない。民衆の日常の「用」を旨とする民芸が便利でないというのはおかしいのであるが、実はそこが民芸の真骨頂である。

民芸は重たい(不便)という批判に対して浜田庄司が「こんなものを重たいと感じるようでは、あなたの体力が心配だからもつと体を鍛えなさい」と云つたというエピソードがある。これこそまさに、不便を益として人々の暮らしを支える民芸の世界である。

自然素材、簡素、丈夫で長持ちの日用品を手で作る。プラス「不便益」というのはどうだろうか。以下  
次号。  
(陶工、協団本部常任理事)